
とある隠れ変態の物語

来海ララ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある隠れ変態の物語

【Nコード】

N2781V

【作者名】

来海ララ

【あらすじ】

とある街に住む真田 尚輝（高2）は究極の隠れ変態。女好きではなく男好きの男。いわゆる同性愛者。

美しい女性？素敵だとは思うけど別にときめかない。美しい男性？何て素晴らしい響きなんだ！！

残念要素満載な無自覚イケメンの繰り広げる変態な日常物語、開幕！！

のはずが最近ハイレムメンバーの方が変態度が右肩上がり上昇中。

問題ありまくりの変態発言に内心同意したり突っ込んだりあえて突っ込まなかったりする物語。

の方が説明としては正しかったりする。

子猫ちゃん拾いました。（前書き）

初めまして、またはこんにちは。 ララです。 今回の話しも趣味全開
でお送りいたします。

変態思考なら任せろ！みたいなノリで書き始めた物語なのですが、
相変わらず後先考えずなのでこの先どうなっていくかわかりません
ですが、温かい、いや生ぬるい目でも良いので見守っていて下さい
……。

子猫ちゃん拾いました。

突然だけれどオレの頭の中にはメロディーが鳴りだした。

迷子の迷子の子猫ちゃん、あなたのお家はどこですか、と。

そう、どしゃ降りの雨の中にオレは子猫ちゃんを見つけたのである。それも膝を抱えた子猫ちゃん。

しゃがんで膝に顔をうずめる様子なんかもうきやわゆいの権化でさあ、ねえこの少年口説いて良い？

にやりによりと激しく怪しい以外に形容しがたい変態的笑みを口元に貼り付けるイケメン。

周りにはさぞかし残念に映ったことだろう。

「君」

何とかにやにやを抑えて子猫ちゃんに声をかける。

顔を上げた子猫ちゃんは黒縁メガネっ子だった。もう萌えの結晶だ。

ああああ可愛い！！

背丈はあるし、かつこいい系なんだけど子猫ちゃん以外に何と現したらっ……。

上目遣いがたまらない。ぽかんとした顔もたまらない。出来れば抱きしめたい、そしてそのやらしいうなじに指先を這わせたい！！

「ずぶ濡れだよ。大丈夫？」

傘を子猫ちゃんの頭上に持って行き、自分もその場にしゃがみこむ。顔をよく見ると……

い、イケメンだ。

とんでもないイケメンがここでびしょ濡れになってるよ！！色香がむんむんしてるうう！！！！

大変だほっぺの肉がひくひくしてきた……いつもなら我慢出来るのに、にやにやがつ。

完全に変態思考な事で頭をいっぱいにして微笑みかけるイケメン。世の女の子達はこれを知ったらどう思うだろうか。

我慢して我慢して、いやらしくは見えないであろうまんべんの笑顔で見つめると、なんと子猫ちゃんが

がばっ！つと抱きついてきた。

そして一言。

いや、二言。

「寒い。お兄さん助けて」

「うん、いいよ。家においで」

もう即答。即答だなんてこったい。何だこのイベントは。現実世界はいつから攻略ゲーム方式になったのだろうか。
分からないけどラッキー！！

内心ガッツポーズを取りまくりながらどさくさに紛れて腰に腕を回すとお兄さんえっち、なんて表情を変えずに言う。

何？変態め？ははは、今更何だ。ゴーイングマイウェイだ。

「まあまあ、ね。ほら立って」

子猫ちゃんを支えて立たせ、傘の中に入れて肩を抱き寄せる。

すっかり冷え切った体を少しでも温めようと、バックから出したタオルで拭く。何て素晴らしいイベントだ。うわ色っぽい。滴る雫とか伝う首筋とか鎖骨とか。あはははやばい！！

さあ、行こうか。子猫ちゃん。家はすぐそこだからね。

楽しい休日の始まりだひゃっほーい！！明日が休みで良かったー！！

——真田家

「ありがとうございます」

「いいえ。寒いよね？タオル持ってくるから」

着くやいなやぺこりと頭を下げる子猫ちゃん。何て礼儀正しいんだよし後でなでなでしてあげよう。タオルタオル、っと。

洗面所のオレンジ色の棚をあさくって目的の物発見。いざ、少年の元へ。いざ、少年の元へと下心を頑張って隠してタオルを渡すと、こてんと首を傾げられる。

「何でここまでしてくれるんですか？」

ああそれが。

「だってあんな雨の中にいたら風邪ひいちゃうでしょ？オレ一人暮らしたから遠慮しなくて良いよ」

だってこれはチャンスでしょ？可愛い子猫ちゃんがずぶ濡れになってたら理屈こねて持って帰って来なきゃ。オレ一人暮らしたから遠慮なんて必要無いし。えへへ。

「お兄さん優しいんですね。助かりました」
「いえいえ。気にしないで」

いえいえ。下心満載ですから。

「侑里^{ゆうり}」

「え？」

「オレの名前です。君じゃなくて名前で呼ばれたいので」

おおおそれはそれは。

呼んで下さいじゃなくて呼ばれたいのでときたか。何て可愛い思考回路してるんだ。そして初対面のオレに名前を覚えてくれるとは。何て無防備なんだ、是非とも襲わせて頂きたい。

「うん分かった侑里くん。オレは尚輝^{なほき}って呼んで？」

「尚輝……お兄ちゃん？」

こてん、と再び首を傾げる侑里くん。

うわああ不意打ち不意打ち！！何々どうしよう！？お兄ちゃん？お兄さんじゃなくてお兄ちゃん？！！！！

大事な事だからもう一回言うよ、お兄ちゃん？！

「そう。宜しくね」

「宜しく願います、尚輝お兄ちゃん」

やはり笑いはしないけれど、少しだけ、少しだけ表情がやわらかくなつた気がした。

「お願いがあります。迷子になつたので、助けて欲しいんです」

「うん、分かつたよ。とりあえず、中入って？」

「おじゃまします」

「はいどうぞ」

迷子か……。つて事は、迷子の迷子の子猫ちゃん、は間違つてなかつた訳か。我ながら凄いな。

でも何で迷子？もしかして

「究極の方向オンチなんです。すみません」
やっぱり。

何て可愛いんだ、方向オンチ？それならお兄さんが何処へでも連れて行つて——、あれ？

そういえば侑里くんて何歳なんだろう……。

「ねえ侑里くんてさ、何歳なの？」

「15歳……中三です。お兄ちゃんは？」

「オレ？オレは17歳——高二だよ」

「高二……ですか」

「そうそう。あ、そうだ。侑里くんち、電話しないとね？きっと皆心配してるよ」

「番号……忘れちゃった」

「そっか、忘れちゃったか」

本当に可愛いんだなあ、自宅の番号も忘れちゃうなんて。

……ん？

て事は。

「ええええええ!!」

この子、家帰れないじゃないか!!?!?!
どうするの?!

どうするの、もらっていいのっ?!

こんな状況でもそんな思考回路になってしまっ自分が恨めしいが、
どうしてもそう考えてしまっのだから仕方無い。
にしても……

どうすんの、この状況。

子猫ちゃんといちゃこら（前書き）

暴走しすぎてとんでもない事に……。

子猫ちゃんといちゃこら

どうすんのどうすんのと頭で必死に考えて考えて――

「携帯」

「え？」

「携帯見れば分かる」

侑里くん！それ、先に言ってくれる？意外にあっさり解決しちゃったよ――！

残念、もらえないのか……。

解決したのだから喜ばなければいけないのだろうが、素直に喜べない。お泊まり会は無しか……。

「でも外雨凄いいから、出来れば泊めて欲しいです」

「良いよ良いよ。泊まってる？」

よっしゃきたー！！台風万歳万歳。

「尚輝お兄ちゃん、寂しがり？」

「あはは、そうかもしれないなあ……。――っえ？」

照れ笑いを浮かべて顎に指を添えていると、侑里くんが頭をなでなでしてくれた。

「寂しがりな尚輝お兄ちゃん……。一人暮らしだから？」

二人で座るにはいささか狭いソファーだから距離も吐息も近い。

やばい、楽しい!!

にやにやとしそうになって、必死にそれを押しとどめる。無理に我慢したせいで眉を寄せた、少し寂しそうな表情になってしまった。侑里くんは、その短い沈黙と表情とで問いを肯定していると思ったらしい。ぎゅうつと抱きしめてくれた。

「尚輝お兄ちゃん……こんなに優しいのに、悲しまないといけないの……」

「侑里くん……?」

待つて待つて待つて待つて、オレおかしくなりそう!!!!!!

何かあれだ。オレ侑里くん大好き!!!!!!

あんまり表情変えないけど優しくて、ちょっと勘違い屋さんな侑里くん。

最早愛しいです。

でも、今は侑里くんの勘違いに乗らせてもらおう、うん。

「でもね、今は侑里くんがいてくれるでしょ?だから、寂しく無い。せめて今夜は一緒にいて欲しいな?」

「尚輝お兄ちゃん……ちよつとえっち」

「そうだね。侑里くんが優しいから食べちゃうかも……しれないね」
「っ……………」

おおお、真っ赤になった。

メガネの奥の双眸はずっと涼しいままだった、のに。

オレの膝の間でちょこんと座り直す様子にはあんまり余裕が無くて。

「いじめちゃったね……?ごめん。シャワー浴びておいで。びちょびちょだから、風邪ひいちゃう」

「はい。あ、夜ご飯は迷子になる前にかろつじて済ませてあるので……」
「了解。ゆっくり入って来てね」

「シャワー、ありがとうございました。……服も」
「いいえ。侑里くんは、甘い物平気？」
「はい。……というか」
「甘党、かな？」

「……はい」
もう駄目だ、我慢出来ない。

「パジャマ似合うね。可愛いー」
思わずすりすり。ほら、にやんにやんにすりすりしたっておかしくないよね？

「チーズケーキあるから、食べよ？」
「ありがとうございます……」
「いいえ」

いただきます、小さく呟いてケーキを口に運ぶ。すると一瞬にして表情がほころんだ。
美味しい……。瞳をキラキラさせてそう言侑里くんは凄く嬉しそうで、こっちも嬉しくなる。

「実は手作り」

「手作りっ?!」

にこつと笑ってそうだよ、と口にするとしばらくの間じつと見つめられて。

「あーん」

何故そうなるのかケーキをオレの口元まで運んでくれる。

「あーん」

素直に口を開けてケーキを待つ。口の中に入り込んできたケーキは特別に美味しい気がする。

あれ、これって間接キス? 侑里ちゃんと間接キスッ?!

うそー!?!?!?

たっのしいい!?!?!!

もう有頂天。テンションマックス。

ゆーとりくんつと、かんせつつきっす〜♪

あーんにはまったのか、それからも天使な時間は続いて。

「あーん」

「あーん」

「あーん」

「あーん」

「こーんやはたつのしいいな」

「あ、自宅には電話した？」

「はい。明日の昼頃、来てくれるそうです。……住所は後で送ってと兄が」

「お兄さんいるんだ」

きつとすつてきなお兄さん」

「大学生です」

「そっかそっか。侑里くん、あーん」

「あーん」

ちゅ

「へ？」

ごめんね、したくなっちゃった

耳元で囁くと隣にいる侑里に頬をわしつとつかまれる。

え？

と、唇に柔らかいものが……。

そしてすぐに口の中に温かい舌が入り込んできて…

「っ、んふ…むっ」

侑里くん?! どうしてそんなにサービス精神旺盛なの、君は!!!!!!

ちゅぱ、と音を立てて唇が離れていき、負けず嫌いです、と動く。

いよっし、それなら。

「お兄ちゃん、やられっぱなしは悔しいから。……舌、出しなさい」
「……はい」

うん、やっぱり素直な子だ。

それを良いことに、その舌を思い切り吸い上げる。びくりと肩が跳ねるけれどこれはまだ序章。

舌を伝って口の中へと入り込み、口腔をぐぶぐぶと舐めまわして官能をくすぐった。

「あふう、んっ、んんうっ」

瞳を潤ませて眉を寄せる。

どうしても耐えられないらしく、軽く腰が動き出してきた。

——そう、このまま……。

侑里くんを抱きしめながら深いキスをさらに深くして。

はあはあと息を荒げる可愛いにゃんにゃんは、もう何をしても誘っているようにしか見えず。

それから侑里くんの負けず嫌い和尚輝の下心のせいで悪循環は続き。

以下、会話抜擢。

尚輝攻め

「おにいちゃ、あんっ、そこ駄目えっ」

「侑里くんなんてオレのアナル舌突っ込んだでしょ？ペニス舐める位何？」

「はあ、はあっ、口、入れてしゃべん、ない、でええっ」

侑里攻め

「ほら、ちゃんと足開いて下さい。オレのと擦れないでしょ」

「いや、いい、いいって。そろそろオレおかしくなりそう」

「開いて下さい。ローション塗っちゃいますよ」

「もう塗ってるし！！ちよ、侑里くんっ……っひあ、あっ、君も十分えっぢゃないか！！」

「まあ、兄程では無いにしても、こんなになってる尚輝お兄ちゃんをほっとけないでしょ」

「答えになってない答えになってない！！」

とまあ、どんどん悪化し。

最終的には尚輝の下心が勝った訳だけれど。

結果、分かった事は。

侑里くんはものすごい負けず嫌いで、ものすごいえっちつて事。
それと彼曰わく兄はオレを超えますらしいから、お兄さんはもうい
ろいろとんでもない。

明日会うの、楽しみになってきた。

容赦の無い弟は拾われました。

時を二時間ほど遡った、五時頃――

マンマミィア、マンマミィア、と某ゲームの某キャラが息の音を止める瞬間の苦しげな声が携帯から流れる。

侑里か……。

友人にいい加減着信音をマ。オの息絶える時の声にするのをやめろと言われたが、約半年程無視をし続けていた。
だって、面白いだろ？

次は何にしようかと考えつつ、電話に出ると

『ドラ。もんが道具を出す瞬間のメロディーにしたら？』

『おお良いなそれ――っておい』

『何？』

『何で分かったんだよ』

『どうせ次はどんなのにしようかとか、考えてたんでしょ』

『いやまあ、そうだけど……。で、お前の用事は何だ？迷子か』

『うん。迷子になった所を優しく綺麗なお兄ちゃんに助けてもらった』

『まじで？お前の迷子癖にはもう突っ込まないけど、優しく綺麗なお兄ちゃんっておま、良いなあ』

『ついでにちよつとえっち』

『おおお、文句なしだ。明日迎えに行つてやるからいい夜過ごせよ』
『うん分かった』

侑斗には相変わらず変態だな。

いつもの事だけど。とか、考えてそうだな……。

『それで、どれ位綺麗？』

『千春さん位』

『ええそれやばいな！！』

千春さん（男）、とは夜の街で大活躍している隼人さんの恋人（男）である。隼人さんも綺麗だけど、彼の綺麗さとは部類が違う。淡々としゃべる侑里は何を考えているのかよくわからないけど、とにかくその綺麗なお兄ちゃんが本当にお世辞でなく綺麗なのだという事はよく分かった。

『千春さんの背が少し縮んで、口調が優しくなったら尚輝お兄ちゃんになる。後、多分だけど自分が綺麗って分かってない』

『よっしゃきた！！明日はオレも泊まっちゃおうかな』

『侑斗には尚輝お兄ちゃん襲おうとするから駄目』

『えー何でえ！！！！せつかくの休日、楽しく過ごしたいだろ』

『侑斗にいの楽しくは体の関係に発展するから駄目。そろそろ切るよ』

『えー何でえ』

『オレ今裸』

『えっ？！何で！！！！』

『風呂』

『えっ？！！！！……………ああ、風呂ね』

『変な事想像したでしょ』

『えええ別に？ベットでハグされながら携帯中とか、考えてないし？』

『全部言ってる。じゃあね』

『待て待て待 ぶちっ』

見事にブツ切りを弟にされて地味に落ち込む。

あいつは容赦なさすぎだ……。

両親は今海外出張中で家には侑里とオレしかない。二人きりでも寂しいのに、一人はもう孤独としか言い表せない。

それだけに、明日がやけに楽しみだと感じた。

お昼寝は子猫に囲まれて

ピンポン、とチャイムが真田家に鳴り響く。

現在は十一時。時間帯的に考えて、侑里くんのお兄さんが迎えに来たのだろう。

さて、どんな素敵なお兄さんなのか、いざ行かん!!

「はい」

返事をしてがちゃりとドアを開けると、そこには長身で美人でやわらかな金髪のお兄さんらしき人。

「侑里くんのお兄さん、ですか？」

「そう。始めまして、侑斗です。尚輝お兄ちゃんって、君？」

「おにいちゃ……はい、そうです」

そうか、侑里くんはお兄さんへの電話でもそう呼んでたんだね……。それにしても、この人が。

……本当にすつてきなお兄さん、だなあ……。この人が凄いえつつて、何だか分かる気がする。

何でつて？だってこの人さつきからフェロモン垂れ流しだよ!!いや、変態とフェロモン関係ないけどさ。

昨日引き続き、外は絶好調に雨。台風は過ぎ去ったみたいだけ……。

そのせいで髪や服に少し水分が含まれていて、長いまつげにも、綺麗な色をした唇にも、いつも以上の色香が漂っているのであろっ、きつと。

そんな事をぼつとしながら考えていると、突如妖艶な笑みを浮かべる侑斗さん。

びくりと心臓が跳ねる。

「確かに。侑里が言ってた通り、凄く綺麗……」

顎を指先でくいつと上げられて、視線を合わせられる。

「お前……おいしそうだな」

舌なめずりをする様子なんかも、綺麗過ぎて様になる。

「……侑斗さんの方がおいしそうですよ？」

「食べてみる？」

くすり、と笑うこの方は、確かに変態だ。下手したらオレより……

いや、それは無い!!!!

それについてはオレが度を超えてるからなあ。

それにしても。

今までは頑張つて変態であるという事実を隠してきたのに、どうしてこつもこの兄弟にはあっさりバレてしまったのだろうか。

謎だ。

侑里くんについては、昨夜の事があるから仕方ないとしても。

……いやいや、何で腰に腕を回しただけで変態扱いされたんだろ。

あれかな？オレも変態なので、分かりましたとかいう同族察知機能が発動したのかな？

「……とか言つて」

「へ？」

「侑里がちょっとえっちつて言つてたから、試したくなつただけ」

なるほど、犯人は侑里くんね。

納得。

タチが悪いなあ、二人共。

「あ、侑里は？」

「侑里くんは昨日びしょ濡れになつたのが祟つてか、少し熱をだしてしまいました……ベットで寝てます」

「尚輝の？ベット？？」

「は、はい」

何だろう、急に。

「なにそれ。羨ましい」

うん、変態だ。確信した。

侑斗さんはオレの部屋に入るなり、それはもう瞬間移動のような速さで侑里くんの近くまで行き――。

「お前、わざとか？」

病人にかける言葉がそれかっ！！！！何て突っ込み所満載なんだ。

「わざと？オレは侑斗にいほど変態じゃない」

「それはそうだ」

え？じゃあ侑斗さんの場合本当に病気が分からないって事？

拾ったの、侑里くんが良かったかも。

それにしても、それにしてもだ。

素晴らしい光景だ。

二人共綺麗だからもう、絵になっちゃって絵になっちゃって。

そっか、だよな。よしよし。

なんて言いながら侑里くんをなでなでする侑斗さん。

くすぐったそうに目を細める様子もやっぱり子猫みたいで可愛らしい。そして恒例のおでここっつんである。

うわ、うわそろそろ自制心飛ぶ！！

「微熱程度で良かったな」

「ん。……侑斗にい。…手」

「手？甘えんぼ」

「いいよ、何とでも言ってよ」

相変わらずあまり表情は変えずに差し出された手に指をからめる。

そうすると、やはり少しだけ表情がやわらかくなった気がして。

何て言うか、正直とってもごちそうさまな感じ。

「はあ……」

美人って良いなあ良いなあ！！

ほれほれしちゃう。

んで、さつきから気になってるのが、侑斗さんのフード。なんか余分？な布が付いてる。
いやしかし、場合によっては余分所か、そのフードを被って下さいになるんだけど。

「ネコミミフード」

——えっ！！！！

「ネコミミ？」

「うん。オレが誕生日あげたやつ」

「そうそう。可愛いだろ？」

やつぱり？！

あの布ネコさんのおみみ？！！

ネコさんのおみみを両手で持ってぴこぴこ動かしてみせる変態美人。
やめて、まんべんの笑みなんて浮かべないで！！！！
侑里くんプレゼントのセレクトナイス！！

「そうですね。何か無駄に似合う……」

そうですね、似合い過ぎて……！！似合い過ぎて……ハグしたい
！！やばい、吐血する……

「尚輝、お前もこっち来いよ」

「いいです、オレは」

勘弁してくれえ……

「尚輝お兄ちゃん……」

「え……」

「尚輝、オレと侑里嫌い？」

「えええ?!」

まさか、めっそもございません!!むしろ大好き。

「おいでよ?」

「来いって」

待て待て待て待て、二人して首かしげるのやめてくれる? ついでに
瞳うるうるさせないでくれる、良いの、行っちゃうよ?

「は、はい……」

そろそろと歩いて行くと、満足げになっり。
とっても可愛い子猫な兄弟。

で、何でこうなるの?
オレ心臓痛いよ……。

何故かシングルベットの真ん中にオレ、右に侑斗さん左に侑里くん。
何故かハグされて何故か囲まれて。

「尚輝お兄ちゃん、さみしんばだから」

「あ、そうなのか。可愛いな!」

あなたは美しいです。

「じゃあ、お休み」

「へ?」

「早起きだから疲れた。じゃ」

じゃって……。

にこりと微笑んですーすと早くも寝息をたて始める。

え、え?! こんなのって、何て言うんだっけ?

うーんうーんと必死に考える尚輝。けれども段々眠気が襲ってきて、駄目だ眠たい、そう思ってしまった瞬間、眠りというまみどろの中に引きずり込まれた。

それから約二時間……子猫に囲まれて、お昼寝タイム……。

そして目が覚めた時……

わっ、これって………

ハーレムだ。

今夜は素敵な夜ご飯♪

「うわ、すげえ雨」

「わー……この中帰るのはちょっと危険ですね」

「……………」

あの後昼ご飯をみんなで食べて、わいわいしゃべっていたのだが、盛り上がり過ぎて結局夜の六時半。雨が再来したせいで（しかもまた台風みたいな勢いの）星草兄弟は真田家で足留めをくらっていた。しかしこの兄弟、既に手慣れた様子で、ネコミミフードの兄は絨毯の上でごろんごろんしているし、風邪を引いた弟はベットの上で読書タイム。

「なあ」

「はい？」

そして兄、侑斗さんは唐突に

「今日、泊めて？」

急にそう言い出されたら普通は困るのだろうが……

ほらオレ、普通じゃないからさ。もちろん

「いいですよ」

当然、もちろん、当たり前。

オレがこんな美味しいお願いを断る訳無いでしょ。

今夜も楽しい楽しいイベント……あるといいな。〇、〇、〇。

そして、夕食タイム。

今日の夕食は、みんな食べ盛りだから大皿に大量のお肉炒め、そして豆腐ハンバーグにベーコンとチーズのシーザーサラダ。

「うまい」「おいしい」

侑里くと侑斗さんがほぼ同時に言ってくれるものだから、嬉しくてくすぐったい気分になる。

「ありがとう」

思わず笑みを浮かべてしまう。

「尚輝、いい嫁になるぞ。いつそオレが」

「侑斗には変態だから駄目」

「ええ、何で!!!!!!お前だって変態だろ」

「侑斗にいきなりマシ」

いや、侑里くんも昨日結構凄かったけど。

思った事が通じたのか、視線が合うと侑里くんに、ふっと不適な表情をされた。

本当に何を考えてるか分からないなあ……。まあそういうミステリアスな所も魅力の内の一つなんだけども。

「尚輝お兄ちゃん」

「うん？」

「あーん」

「あーん」

あぐつ。

うん、美味しい。やっぱり侑里くんのあーんには不思議な力があるんだな。一気に美味しくなった。今夜も天使タイム♪

「何だよ、二人して。尚輝あーん」

「あーん」

あぐつ。

あれ？

侑斗さん自分で食べちゃったし！！！！

お茶目だな、と思って口を閉じると

「らから、あー」

だから、あーんと言いたいらしい。再び口を開けると、何故かあの綺麗な唇が近付いてきて――。

ぐいつと口の中にベーコンとチーズのシーザーサラダが突っ込まれる。それから少し、口腔を舌で舐め回されて

「はい、じゅっくんして」

ごくつ。

「うん、美味しかった」

「美味しかったって侑斗には何を味わってたの」

「ちゅーとサラダ」

「サラダはついででしょ」

「おー、よく分かったな」

だろうね、と呟く侑里くんは若干呆れ顔。

オレ？オレはもう素敵なイベントに拍手送ってる最中だよ！

侑斗さんに舐め回された口腔はいつまでも熱くて溶けそう。再び舌なめずりしながら妖艶な笑みを浮かべて、オレの心をつかさどっていく。

何でもこうもときめくような事をしてくれるんだろっ、この兄弟は！

！！！！どっちが好きって？

どっちも好きだよ！！！！エヘッ

「にしても、尚輝って料理上手いな」

「ありがとうございます。良かったら、また食べなくなったら来て下さい」

ありがとうございます。食べなくなったら来て下さい。次はオレが
あーんやるので。うへへ！！！！

「ん、分かった」

「チーズケーキ、美味しかった」

「ケーキならまだあるよ」

「ケーキ？何だそれ」

と、言う事で、昨日引き続きケーキタイム。今日はチーズケーキプラス、プチフルーツケーキ。

「どうぞ」

「いただきます」

同時に言っ たと思いきや、

「「あーん」」

同時にこれである。

「いや、次はオレが先に」

「侑斗にいちゅーするから駄目」

「いや、ちゅーはしない」

「するつもりでしょ」

「お前だつてそうだが」

やはり無表情な侑里くとぶつと頬を膨らませる侑斗さん。

対称的で子猫な兄弟にはさまれてあーんの嵐。

もったまらないね、これは。

全国の変態の皆さん、

どうだ、羨ましいだろう。

今夜は素敵な夜ご飯♪（後書き）

こんな夜ご飯、あつたらいいのに（笑）

素敵な休日の後、学校も素敵だった！

「あら、真田くん、おはようございます」

「柚仔さん、おはよう。今日も綺麗だね？」

「あつ、あらあ……」

柚仔 美結、柚仔財閥の一人娘、正真正銘のお嬢様だ。

彼女はどうかやらオレを気に入ってくれたらしく、毎朝欠かさず挨拶をしてくれる。クラスメートに良いなあ良いなあとよく言われるが、オレは正直そこまで羨ましがられる理由が分からない。

ほら、オレ女性興味無いし。

綺麗だとは思うけど、ときめいたりはない。

それだったら野郎しかいない教室の中の方が楽しいかな？

オレの通っている比等学園は女子と男子でクラスが分けられているので、教室内は野郎のみ。とっても素敵な空間だ。

「あつ、尚輝いおはよー」

「おはよう、舞亜」

前の席の舞亜 羽恋。 “女性” みたいな名前で、 “女の子” みたいな容姿が舞亜の特徴。

確かにオレは男が好きだけど、野郎しかいないのはやはり華が無い。そんな教室の唯一無二な華的存在。

本人は知らないが、女性より野郎ファンの方が圧倒的に多い。

「尚輝、数学の宿題分らない所あって」

「ん、どこ？」

舞亜の出したテキストを覗き込み、解き方を思い出す。確かこれは

「あ、オレここ得意だから教えられそう」

「尚輝が得意なのは勉強全般だろー」

ぷつと頬を膨らませて舞亜は言うけれど、朝っぱらからそんな事されたって興奮するだけだから、出来れば放課後に……。

内心舞亜の可愛さに、にたにたしながら問題をちよいちよいと解いていく。

「はい、出来た。解き方はここに書いてあるのを読めば分かる筈だから」

「おおー！流石だなあ」

「ありがとう」

フツとクールのアレな笑みを顔に貼り付けるけれど、内心乱れまくっていた。

ねえ、舞亜さん？羽恋さん？お願いだから、手なんて握りしめないで。

ときめいてそのノリで体が浮くよ！！？！

素敵な休日の後だから、学校行くのノリ気じゃなかったんだけど、このハーレムな教室を忘れてた。

オレ、今日一日君たちの為に頑張るからねっ♪

「にしても、尚輝って凄いよな。勉強出来て、スポーツ出来て、顔も良いとかどつかのアニメの主人公みたい」

「え、何？それオレの事？」

「お前しかないだろー。オレ尚輝の事大好きだぞ？」

「何それ。凄い嬉しい！」

きゅー、っとちっちゃいわんこみたいな舞亜を抱きしめる。あんまり可愛くて我慢出来なかった。

自重？ナニソレオイシイノ？なんていつのネタだよと思うような言葉まで浮かんでくる始末。

参ったなあー（。；ノ）ノ　　あはは。

「んうー、尚輝苦しい……」

「ごめんごめん。今凄く疲れてるからさ、舞亜オレの癒やしになって？……良いよね」

「んむむ、無言の重圧感じるぞ？な、尚輝なら、良いけどなっ。こんな事するなんて珍しいし」

「ありがとー大好き、超大好き。舞亜ぎゅー」

ちっちゃくて可愛くて人なつっこくて大好きだと言ってくれる舞亜。教室内で一番の癒やしかも。

「なおきい……そろそろ、視線、い、い、いたい……かも」

「視線？ああ、ごめん。流石に朝から男同士でハグは無いよね」

やばい、調子に乗っちゃった。変態ってバレたかな、星草兄弟の時みたいに。

「うっん、オレは良いんだけどな。……尚輝のファンの女の子の視

線がな、廊下の方からばしばし来て……」

オレは全然良いんだぞ良いんだぞと言う舞亜は、本当に嫌そうには見えなかったのだほっとした。

「オレのファン？あはは、いないいない。舞亜のファンじゃないの？」

野郎の、とは言わないでおく。

本当に信じられなくて、廊下の方の会話に耳をすませると、比較的近くな為よく聞こえた。

右端の集団

「あらあんなにくつついて！！朝からなんて事を」

「尚輝様はお優しいから我慢してるのよ」

「いやーん、信じられない」

え？何？今のって明らかにオレから抱きついたよね？何でそうなるんだろ。

左端の集団

「おおお？朝から？朝からあんなうふふ？」

「あつはつはつはたまんねえわ」

あれ？左端の集団は好印象？というか、オレと同族の子達だよし、ここはもうちょい。

「舞亜、ちよつと付き合つて」

「ふえ？ひひよー」

途中からイチゴジャムのパンを食べ出した舞亜の腕を掴んで左端の集団近くへ。

「……羽恋」

「ふええ？は、はれ、なまなまなまえ……」

初めて名前で呼んだからか、少し動転してる様子。可愛いから無視。

「名前じゃ、駄目？羽恋だつて尚輝つてオレの事呼ぶよね？」

「別に駄目じゃ、駄目じゃ無いぞ？！」

「うん。ありがとう」

「名前で呼び合う仲？！」

「どんな仲、どんな仲？！」

うん、間違い無い。
同族の方だ。

同族の方にはサービスしなきゃ！！

「尚輝、パン食べるー？」

「ん、ちよーだい。あーんして？」

「ふぁ、つう、あー？」

「あーん」

あぐっ

「あーんきたぁああ」

「そうなの、そういう仲なのー」

「えへへやっぱりえへへ！」

ちょっと誤解されちゃったけど、まあ良いや。
素敵な誤解だし。

そしてここに星草兄弟が来たらもつと面白い事になるんだろうなあ
と考えて、いざ妄想ワールド。

侑里『尚輝お兄ちゃん許して（棒読み）』

尚輝『ぐっへっへ、良いではないか良いではないか』

侑里『そんなー（棒読み）』

尚輝『回れ回れ』

侑里『あーれー』

尚輝『もっと回れ』

侑里『あーれー』

侑斗『え、何々、悪徳代官ごっこ？オレもやりたい』

侑里『お兄ちゃんは駄目だよ（棒読み）』

侑斗『ええ、何でええ』

侑里『体の関係に発展するから（棒読み）』

羽恋『ひいつ？！尚輝って変態だったのか！』

駄目だ、速攻ばれる！！！！

この兄弟は綺麗だけど危険だ……。

「尚輝？どしたんだ？」

「ああ、いや。何でもない。あれ？口の端、パンくず付いてるよ」

取ってあげるね。

右端の集団の誤解を解くべく、わざと右側に寄って会話が聞こえるようにする。

なおかつ、左端の集団のサービスにもなるように、真ん中辺りで。とん、と壁に寄りかかせて羽恋の頭に左手を添えながら……。

「ぶっ」

左端の集団の子が一人ぶっ倒れる。今からが良い所なのに。

「はい、取れた。羽恋はおちゃめだね」

真っ赤になる羽恋と左右の集団。
でもやっぱり、羽恋が一番。

教室内の羽恋ファンの視線がぐさぐさと刺さってきたが、無視。
真っ赤な羽恋を前にすれば、オレは怖いものなんて無い。

帰り一緒に帰っていた時なんか

「……………なあ、どしたんだ。今日の尚輝おかしいぞ？その、何か……………
ときどきする……………」

「ふふ、嬉しい事言ってくれるね」

羽恋にまでおかしいと言われたけど、これはアリだ。もう最高にアリだ。人目が無いのを良い事に別れ際、おでこにちゅーしてきた。星草兄弟はしょっちゅー真っ赤になったりしないから、羽恋の反応は凄く新鮮で。

「ちゅ」

と頬に仕返してくれた彼が愛しくて持ち帰りたい気持ちでいっぱいなのだが、流石に自重した。その代わり来週遊ぼうなど言ってくれたので十二分に盛り上がった。（内心）

その後、クラスメートの喋った事も無い野郎から

『真田って舞亜と仲良いんだな』

なんて言われて。

『そうだね。何かと頼ってくれるから、それから段々ね』

そう言っていると羨ましいな、と苦笑いして立ち去ってしまった。

しかし、今日は羽目を外し過ぎた。これ以上行くとバレる。女の子に優しい優男キャラ演じとかなないと、ホモだって気付かれて、羽恋に嫌われて……

うわ、悪循環！！

これからは気をつけよう、と肝に銘じた尚輝であった。

羽恋とデート、正午の部（前書き）

学校編、飛んで飛んで羽恋とデート（笑）
書きたかったんです…

羽恋とデート、正午の部

やっと梅雨も明けた今日この頃ここ最近。

それでも湿度はまだまだ高くて。正直こんな季節に出かけるなんてありえないんだけど。

今日ばかりは特別だ。

だって、隣に居るのが羽恋だから。

来週遊ぼうと言ってくれた羽恋に乘っかり、現在は楽しくお昼ご飯タイム。

そして高校生のお昼といえば、ジャンクフードが定番。その中でも圧倒的な人気を誇るのが、マック。

「そういえば、羽恋と遊ぶのって初めてだよね」

「だよなー。今までも何度か誘おうと思ったんだけどな、尚輝っていつも女子が男子に囲まれてるんだもん」

「あはは、そう、かなあ？」

「そうだそうだ。だから……」

「うん？だから？」

ポテトをほおばっている羽恋の顔を覗き込むと、ほんのり朱色になっ

ていて。

「な、何でもない」

「ふふ、どうして黙っちゃうの？……もしかして、嫉妬でもしてくれたかな？」

もしもそうだったら、躊躇はしない。即抱きしめる。んでどさくさに紛れてほっぺにちゅーする。

まあ、有り得ないけどね。どんだけタラシなんだよーとか言われるだけに決まってる。

と、思ったのに。

羽恋はさらに真っ赤になって、恥ずかしさからか涙をつつすらと浮かべ、綺麗な瞳を濡らしていた。

「……ん、っ……あっ、なあきいつ……」

あんま見ないでえ……恥ずかし……。

羽恋は二年にあがってからの友達だから、まだ半年も一緒にいないけど、凄く分かりやすい事と凶星だと真っ赤になる事は理解した。

もしかしてこれは期待して良いのかも。

「嫌だよ。いくら羽恋のお願いでも聞けない。——ねえ羽恋？教えて」

耳元でそつと囁くとびくりと肩を震わせてじつと見つめられる。

ああ……シアワセ……！

そんな濡れた目で見ないでよ、興奮してくる。

「さっ、最近の尚輝……おかしい。ちょっと……いじわるになった」「羽恋が可愛くてさ。ただそれだけ」

「か、かわっ……。ううう、そうだよ……。嫉妬、してた。だって、だってだって尚輝が他の人とはっか話すからっ、オレの入る余地なんて全然無くて」

一番奥の席で良かった。

仕切りがあるから何しても大丈夫。

正直に話してくれる羽恋が愛しくて。

「ありがと、羽恋。めちゃくちゃ嬉しい」

「はうっ……。でも、でも何かオレ、今の……。ホモっぽくないか？」

「あははっ、そうかもね。でも関係ない。羽恋がそう言ってくれたら、どうでもいいよ。だからほら、泣かないで……。あんまり泣くと襲うから」

「ふえっ?!」

もちろん後半は本音である。けれど羽恋は泣いている自分をなくさめてくれたと解釈したらしく、ありがとなと笑顔で言った。

「まあ……。尚輝に襲われるなら本望だけだなー」

「そんな事言ったら本当に襲っちゃうよ?」

冗談じゃないから、本当に襲うから。

今日は我慢しないって決めたから。いや、多少我慢するよ、多少は。

「うむむ、そんな事言ったら彼女が悲しむ……。あれ?尚輝って彼女居るのか?!」

「いないよそんな子」

変態ですから。いや、ホモですから。

「えー、尚輝ならすぐ出来ると思っただけだな」

「いらないよー、オレは自由が良いし。好みの女の子いないし」

女の子はね。

それより羽恋が欲しいよ。なんて、言えないけどさ。

それから数分後……。

「えっ、良いって。代金自分の分位払うって」

「いいの。オレが払いたいから。ね？バイトしてるから大丈夫」

「うー、ありあと……」

「どういたしまして」

払うから払うからと言う羽恋を無理矢理ねじ伏せて、代金を払う。
やましい妄想をさせてくれたし、可愛い事言ってくれたからさ。
ほんのお礼。
とは言えない。

マツクのお姉さんの、元気なありがとございましてに背を向けて
店を出る。

さて、次は何するかね。

「ありがと……あ、っと、何か命令して。叶えられたら……頑張る
から」

命令?!

なんて良い響き。

羽恋、君人を喜ばせるの上手だね！！！！

でもね？

それは駄目だよ女装してとか言っちゃうから。

「羽恋、それは駄目。オレが勝手に払っただけだから」

「尚輝、それは駄目だ。オレが勝手にしたいだけだから」

うわっ、ひっくり返された！

「……なら、そうだね。オレの彼女役、やってくれる？」

ならここは、当たり障りなく。

「彼女役？オレで良いのか？」

「だって叶えてくれるんでしょ？羽恋」

「むむっ、分かった。じよ、じよ、女装もだったりするのか？」

「その辺の判断は羽恋に任せるよ。叶えてくれるんでしょ？」

よし、地味に重圧かけとこつと。

分かった……とまた赤くなつて言う羽恋は、きっと女装も丁寧にしてくれるんだろうと思った。

羽恋とデート、正午の部（後書き）

連載し始めて10日程経ちました。

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

これからも日々変態度が上昇していきますが、出来れば生暖かい目で見守っていて下さい…。

拙い文章に拙い話ですが、少しでも気に入って下されば感想などを恵ん（d y

本当にありがとうございます！！

羽恋とデート、女の子の部

かつ、

可愛い可愛い！！！！

「……ど、どうだ？」

トマトみたいに真っ赤になってエクステを落ち着き無く指先でクルクルといじる彼、否。
今は彼女だ。

今日の羽恋は深緑のつなぎ、中には半袖ワイシャツ。靴は黒のスニーカー。

髪型は明るい茶色（地毛）で、頭の上の部分がわんこミニミみたいにはねていて、肩上位の長さ。

このままでも正直十二分に女の子なのだが、それじゃ駄目だと言ってクルクルに巻かれたエクステを付けた。

前髪にはハートのピンを付けて、細めの黒カチューシャ。靴は黒のパンプスに履き替えた。つなぎでも可愛いかったが、女の子になるならスカートだろ、と羽恋が聞く耳を持たずふわふわの黒いミニスカートを着用。黒で固めたシンプルスタイル。

「可愛い過ぎる……」

慣れないヒール、しかも十センチもあるためフラフラしながら立つ

ている羽恋はあまりに可愛いくて。

「本当か?!へ、変じゃないか!?!」

「全然。いや、むしろ可愛い過ぎて、オレが変になりそう」

「それはっ……い、言い過ぎだっ。あっ、別に嫌な訳じゃ無いぞ?」

「ふふっ、羽恋……?」

「ななな、な……んだ」

動転して目を回す彼をぎゅっと抱きしめる。

「……欲情、しちゃうよ」

「っ尚輝……、抱いても、良いぞ?」

「羽恋?!」

「い、今は……女の子だから。尚輝の彼女だから……自由にして」

はれーん!!

君はいけない子だ、オレが自由にしたら淫らな子になっちゃうけど
良い?!

良いの?!

にしても綺麗な足だ、触りたい!!!!!!

抱きたいよ、凄く。

でももしたら変態ってバレちゃう。今はまだあまりに可愛いくて抱
きついちゃったで何とかなるけど。何よりクラスメート抱いちゃ気
まずくなるでしょう。

「あれ?真田じゃーん」

げっ、クラスメートだ！……しかも羽恋ファン……気まずっ。

「川島。と、友達？」

「そお。D組の伊沢いさわ 啓夢けいむ」

「どーも、真田……尚輝くんだよね」

「え？何で知ってるの、名前」

「だって人気者だから。オレだって知ってるよ」

「あはは、ありがと」

オレが？人気者？

……分からない。

「てゆうかさ、その子誰？」

「はじめまして、なのかな？」

「は、はじめましてだよ、他校の子だから。オレの彼女」

「ふえっ?!」

羽恋がびっくりして声をあげるが、そういう事にしておいた方が楽そうだ。

『声、だしちゃ駄目だよ？ばれちゃうからね』

『あい、分かった……』

ひっそりと会話をして二人にはにこりと微笑みかける。

「へえー、やっぱいたんだ。にしても、E組の柚子さん悲しむだらうなあ。彼女美人なのに」

「そうは言っても、オレは彼女よりこの子の方が好きだし可愛いと思うから」

「うわ、オレもそういう事言ってみたいわ」

口を突き出しているなーいいなーと言い始めるが、実際は彼女なんていないからよく分らない。欲しいとも思わない。

まあ、今オレの腕の中でパンプスに耐えながらクラスメイトにバレない様に必死になってる、この子なら欲しくてたまらないけどさ。それこそ、無理な話だし。

「ねえ、真田くん。彼女さんの顔、見ても良い？」

「だーめ。恥ずかしがり屋さんだし、きつと一目惚れされちゃうから。見せません」

「ええ、ケチ」

「ケチ言いません。本当に恥ずかしがり屋さんなの。……ベツトでは凄いんだけどね？」

腕の中の負担が若干増える。どうやら羽恋が腰砕けになってしまったらしい。

川島はベツト……?!といかにもな物凄くベタベタな反応をして、友人くんはくすりと笑って、真田くんもお年頃なんだねと言った。

「それじゃ、お二人さん、お幸せに」

友人くんの方は余裕綽々。可愛らしい顔立ちしてるし、女の子にもモテるんだろう。多少の免疫もあるはずだ。

はいばーいと手を振って、川島をずるずると引きずっていく。ベンチに座らせて何かを思いついたかのように、ぽんと手をうって再び近づいて来たかと思えば。

「ねえ、その子男の子でしょ。真田くんてそっち趣味だったんだね」

え、まじで？バレてたっー！！！！

「伊沢くんて、同業者なの？」

な訳無いか、と思いつつ、それ位しかバレた理由が分からない。何のことかなと誤魔化してもかえって確信させるだけだ。だから開き直ってやろう、そう思っただけの対処だったのだが。

「うん、まーね。ピンキーってメイドカフェ知ってる？」

「まあ、名前だけは」

やはり同業者で正解の様だ。

「そこで女装して働いてるんだ。あのお店、女装率意外に高いって知ってた？」

そうだったの？！あそこってそういうお店だったのか！！

「もちろん、お客様には非公認だけどね」

なるほど、内緒で女装って事。

「彼女の事は内緒にしろといてあげる。その代わり、彼女さん、いつか一日だけ貸してくれない？」

「どうして？」

「スタイル良いし。稼げると思うよ」

「嫌って言ったら、バラすんだね」

ばちばちつと火花が二人の間で炸裂する。

この子なら確実にバラす。そう感じたから、きっと睨みつけると、彼は代わりに黒い笑顔で対応してきた。

とんでもない子だ。

「出来れば貸して欲しいかな」

「…………いいよ」
「っ羽恋…………」

オレの胸元に押し付けていた顔を上げて、にこりと弱々しく微笑む。

「あれ、君はF組の舞亜さん…………」

「だから、尚輝を困らせるな。オレはどうなっても良いからっ」

「羽恋…………勝手な事言わないで。それじゃあ羽恋が困るでしょ」

「こんな格好してたオレが悪いんだよ、似合いもしないのに。よく考えたら、こんなのおかしいのにオレが勝手に」

「言うな…………。おかしくないよって言ったら、今度はオレがおかしいけどね。でも、羽恋は可愛いよ。いや、男に可愛いはおかしいけど…………。参ったな、オレが混乱してきた」

あはははっ

こっちは本気で困ってるのに、伊沢くんは声をあげて笑い出した。

「いやあ、らぶらぶだね。分かったよ、それに免じて無条件で内緒にしたげる」

にこにこしあがって。
むかつく。

今度こそじゃあね、それだけ言い残して彼は立ち去った。本当むか

つく。

「羽恋、危険だからオレっ家行こう」

「でも、女装やめれば」

「勿体ない」

羽恋の言葉を遮って、いざお持ち帰り。

抱くのは我慢するけど、恋人同士としてのイベントを少し位、ね？

羽恋とデート、女の子の部（後書き）

羽恋とデート編、二話で終わらせなかったのに……何故持ち帰る（泣）

羽恋とデート、お持ち帰りの部（前書き）

羽恋とデート編、これにて完結。
最後かなり強引ですが、

終わった……。

羽恋とデート、お持ち帰りの部

真田家は立派な分譲マンションの、701号室にある。高校生の一人暮らしにはいささか豪華過ぎるが、ここは七月財閥なかつきの所持品で、社長の秋乃とは仲が良い為、無料で借りているのだ。

「おじゃまします」

羽恋が控えめな声でそう言うと、

「「どうぞ」」

と何故かはもった声の中から……。

この声……もしかしてもしかすると。そう呟き、真っ青になってリビングへ凄い勢いで突っ走る。

「いらつしゃい」

「尚輝お兄ちゃん会えてうれしい（棒読み）」

やっぱりお前らか！……！

「あつれ、可愛い子が！生足きつれだな……ん？男の娘？うわー、

どうしようお兄さん欲情しちゃう」

「……侑斗にいい変態」

……相変わらず綺麗だけど変態だな、この方々は。

「な、尚輝、この人達、だだだ、だ誰だ」

そっか、羽恋って極度の人見知りでもあるんだ。
忘れてた。

「ん？綺麗で変な友人になったばかりの友人達だよ」
「そっか……。って、尚輝、若干目が据わってるぞ？」
「あははっ、そうかなあ？」

そんな事無いよ、と言う尚輝はやはり真っ黒な笑顔で対応してきて
とってもおっかない顔をしていた。

せっかくっ、せっかく羽恋といちゃこらしようと思ったのに！！

でも何だろうこの気持ち。何で嬉しいんだろ？
こんな変態で不法侵入者なのに。

「名前は？」

「……舞亜 羽恋……です」
「羽恋くん？ かあわいいな〜！！」

とたんにぎゅむぎゅむ羽恋を二人で挟み撃ちハグ。
真っ赤になつて尚輝に助けを求めるけれど、とうの尚輝は頭を抱えてしゃがみこんでいる最中。

「なあなあ、この子とどんな関係？」

「クラスメート……」

「えー、クラスメートが女装してくれる？」

「……………オレがつ、勝手にしたんだ」

泣き出しそうな羽恋は、やっぱり自分が可愛いって理解してないみたいで。

見苦しいのにごめん、と小さく呟いた。

「だから、見苦しいとか、そんなのは無いから」

二人にぎゅむぎゅむされている彼の頬をふわりと挟む。大丈夫、羽恋はオレの願いに最大限応えてくれただけだからね。
可愛いし！！

もう最高に、うん！！

「尚輝お兄ちゃん、羽恋ちゃん抱きたいとか思ってるでしょ」

「思ってますん」

「嘘はやめろよ、むつつりですら無いくせに」

「あなたはどうせやましい事考えてるんですよね」

「当たり前だろこんな可愛くて純情な子。お兄さんが優しく抱いてあげるからおいぶっ」

「侑斗にいは変態だから駄目」

相変わらず無表情に言う侑里くんのドロップキックが炸裂。
多分この兄弟の力の差は

兄<<<弟

だと思っ。

常々思っ。

間違い無いとも思っ。

「あはははっ、変なのー」

声を上げて笑う羽恋はどうやら打ち解けた様なので、とりあえずは一安心。

けどオレは安心してられない。この兄弟の口封じをしないと。

「羽恋、水ようかん好き？」

「好き、だぞ」

「なら食べるね。侑里ちゃんと侑斗さんも食べますよね二人は手伝って下さい」

どうやって家に入ったのか聞いて、それを脅しに羽恋に変態だってバラすなって言わないと。

「え〜ん、何で」

「何で？人の家に不法侵入しといて客ヅラするんですか？」

「……はいはい」

―キッチン

「……んで、侑里くんが隅から隅まで鍵の形覚えて、作って侵入したと」

「はいそうです」

「そんな事出来るんだね」

「うん、尚輝お兄ちゃんごめんなさい……」

という事らしい。最早人間技じゃない気がするんだけど。
どうやら事実のようだ。
にしても……

侑里くん、今泣きそうな顔しないでくれる？普段表情崩さない侑里くんがそんな事したら楽しくなっちゃうんだよね。

「ひっ、く、ごめ……なさ……。今、両親が海外、行つて……ずっと、寂しかったから、また……尚輝お兄ちゃんに会いたく……」
「もう分かったよ。寂しかったんだね？」

こくり。

「ごめん。でもしちゃ駄目だつて事は、理解してた。でも、」
「大丈夫です。その代わりオレが変態なのは羽恋に黙つて下さいね？」

こくこく。

「それなら許します。さあ、水ようかん食べましょう？」

ここからは後日談。

それからしょっちゅう遊びに来るようになった羽恋は、どうやら特殊な趣味にハマってしまっただけらしく。

「尚輝尚輝、メイド服とセーラー服だったらどっちが欲情する?？」

「どっちもしません!！」

「ええええええ」

女装趣味な羽恋。マンションの管理人さんには彼女が出来たと思われるてしまい。

オレはと言えば。

「尚輝の為にしたのに」

「オレは変態じゃ無い」

とか言いつつ。

自重に大忙しです。

何ですが、この展開（前書き）

何でこうなったのか自分でも分かりません…

何ですか、この展開

「やば、シャープペン体育館に忘れた……」

時は放課後。場所は教室。

今日はたまたま筆記用具を忘れてしまった為、羽恋に貸してもらっていて、それをポケットにしまっていたのだが。

体育の時間に筆記用具を持って来いと言われていたので体育着のズボンにしまつて……それから、体育館で使つて、舞台の隅に置いたままだ。

ゆつくりとシャープペンの行方の記憶を追つて、羽恋ごめん……と小さく呟いて体育館へと向かった。

現在羽恋はバイト許可願いを提出する為に、あちこちの先生のもとへスタンプラリーに行っていて、当分戻らない。

先に帰つててと言われていたから彼には謝れないけれど、せめて戻つて来るまでに取りに行こう。

早足で向かつて、中へと入る。舞台は緞帳とんちようが閉まっている、って事は多分演劇部が練習に使っているのだらう。

練習中に申し訳ないけど仕方ないかな、と思いつつ、ストレッチをしているバスケット部の邪魔にならない様に隅を通り舞台へ歩いていく。

階段を上り、若干暑苦しい中へと入ると何故かむさ苦しい男子生徒が群がっていた。女子生徒もちらほら。

まあ気になるは気になるが、そんな事よりシャープペン。

「すみません、シャープペンの忘れ物ありませんでした？」

「あつ、これですかぁー？」

舌つ足らずなしゃべり方をするショートヘアーの女子生徒が持っていたのは、装飾品の付いていない無難な物。

紛れもなく、探していたそれだ。

「はい。ありがとうございます」

「えっと、F組の真田先輩ですよねっ？」

「そうですけど？」

そう言つと何故か女子生徒から歓声があがる。

「ファンですっ！」

「かっこいい、うっそん」

「舞亜ちゃんとセットじゃないのが残念ね」

え？何でこうなっちゃうのっ？！

よく分からない。

「真田つ、貴様最近馴れ馴れしいぞ」

「……………は？」

「舞亜と馴れ馴れしいぞって言ってるんだー!!」

「ええええええ!!!!」

状況が飲み込めない。

襟首を掴みあげてくる坊主頭と、品なんて全くない金髪頭が睨んでくる。

侑斗さんの柔らかな金髪とは大違い。

率直にそう思った。

「こらそこの二人。うちの商品に手え出すんじゃ無いわよ」

突如凜々しい声が。

その声に制されてすみませんと謝る二人。

掴みあげられていたのではあったが、
“商品”という言葉
には引っかかった。

その声の発生源に振り向くと――。

「ハアイ、真田くん」

「ゆ……………柚子さん?!」

驚いた事にそう言ったのは柚子で、

「ばれちゃったら仕方ないわね。いつも稼がせてもらってるわよ」
「っ……………!!」

オレが言葉を失ったのは仕方ない事。

にやりと笑いながら言う彼女のそばには自分や羽恋、先日会った伊沢、物腰の柔らかさと女性みたいな綺麗さで有名な生徒会長の瑞穂^{みづほ}さん、DSでオレサマな元生徒会長、薫^{かおる}さんなど、校内屈指の綺麗や可愛いで名の通っている（オレ除き）方々の写真がずらりと並んでいたのだ。

びっくり、現場発見！！

「これは、一体……」

「うふ、ちょっとした小遣い稼ぎと栄養補給よ」

綺麗な顔をにいつと歪めてそう言う柚子には、普段のお嬢様オーラは見当たらない。

「でも柚子さんは美人なんだから、自分でも稼げたんじゃ無いの？」

「いやーね、私が美人なのはとくに知ってるわよー。でも私が体張るよりもあなた達がいちゃこらしてる写真の方が売れるのよねー」

「……お金に困ることって無いんじゃない？」

「親のスネかじるなんてイヤよ」

何て事だ。

美人でおしとやかな筈の柚子さんは、裏では勇ましい売人だったなんて。

「さつてとお、残りは後八枚よ。買った買った」

柚子の一言でどんどん無くなる写真達と、どんどん増えるお金達。八枚の写真は一瞬にして完売し、お開きになった。

それにしても、何でこんな商売始めたの？

その問いの答えは、たまたま行事の時に撮った写真に薫さんと瑞穂さんが写っていて、それを欲しいと言われたのがきっかけらしい。

「いい商売よ。ばんばん売れてくもの。前までは薫さんと瑞穂さんが一番売れてたけど、最近はあなたと羽恋ちゃんのセットが人気ね。ベタベタしてくれるんだもの、いくらでも素敵な写真が撮れるわ」

伸びをしてブレザーの内ポケットに手をつ込む。

何をしているのかと思ったら、そこから出てきたのは一枚の写真だった。

そしてそれは――。

「……………あれー？」

羽恋にイチゴジャムパンをあーんしてもらっているもの。

「五百円が68枚。はい、計算」

「三万四千」

「大正解。一昨日ね、この写真を8枚現像して持って行つたのよ」

「……うん」

「そしたら三十秒も経たないうちに売れて。昨日は20枚。それも二、三分で完売。今日は二倍の40枚持つて行つて、それも五分で完売。これだけで三万四千円の売上よ。供給が需要に追い付かないのはいつもの事だけど、これはかなりね。びびったわ」

この荒稼ぎ方法を思いついたあなたにびびるんだけど？

柚子の横顔は夕陽に照らされて赤く染まっている。

微笑む姿はどう見てもただのお嬢様にしか見えず、実際はそうでは無いのだという実感が全くわからない。

「あなた達のおかげでかなり稼げたわ、ありがとう。……という事で、紅茶でもご馳走しようかと思うんだけど、この後どうかしら」

柚子の提案に乗る事にした尚輝は、現在生徒会室の前にいる。何故紅茶をご馳走する為に生徒会室に来たのかというと、

「私、こう見えても風紀委員だから。ここは自由に使わせてもらってるの。さあ、入って」

彼女の言葉に甘えて入る、は良いのだけれど――。

そこには。

「っ、……………!」

薫さんと

瑞穂さん……………。

が。

「あらあゝ、お邪魔でしたあゝ」

とか言いつつ、薄型カメラでバツチリ現場を抑える。
ここでぽかんとならなかった彼女は、何と云うか、

多分、こういう現場慣れをしているのだろう。

「ふん。仕方ない、続きはオレの家で」

「ま……まだするんですか……」

「お前だって満足してないだろうが」

この二人って、

こういう関係だったのか……。

びっくり、現場発見！！（後書き）

曖昧な終わり方ですが
決して手抜きではありません、わざとです（笑）

> i 2 9 1 2 4 — 8 1 9 <

気が向いたwwので、一人紹介。

連動 れんどう 瑞穂 みづほ

身長：174センチ

髪色：亜麻色

敬語キャラ、女性の様な綺麗さを持っている。

比等学園生徒会長。

母が日本人、父がイタリア人のハーフ。薫に限定してかなり淫乱。
二年の首席。

デジカメとドSとドM

彼女が淹れてくれたのはアップルティー。他にも茶葉があると思っ
ていたが無かったからこれでという事らしい。

「……美味しい」

「柚子さんはお茶を淹れるの、上手ですよ」

「あらありがとう。誉めたって何も出てきやしないわよ」

誉められ慣れているのだろう。

ぶっきらぼうにそう言っ、紅茶を再びこくりと飲みだす。

カップを音も出さずに置く様子なんかはやはりお嬢様で、出来れば
オレの中のお嬢様像をこのまま壊さないで欲しいのだが。

「それで？瑞穂は薫元会長にまた掘られてたのね」
「ぶっ」

やはり無理なようだ。

紅茶を吹き出さない様に口を抑えるのに必死なオレは、当然薫さん
が瑞穂さんの唇にキスを落とした事に気付かなかった。

知ったのは、後日柚子さんのデジタルカメラを見せてもらった時。

「こいつが物欲しそうな顔してたからな」

「っ……薫さん、無理やりそうさせたのはあなたでしょう！ー」

「ちよっと触ったら興奮しだしたのはどこのどいつだ、あ？」

泣き出しそうな瑞穂さんはとんでもない量の色香をむんむんと、多分無意識に放出させている。亜麻色の髪を肩からすべらせて俯くその様子が氣にくわなかったのか何なのか、指先でくいつと顎を上に向かせた。

「言いたい事があるなら言えよ、瑞穂。……言えないなら、無理やり言わせてやろうか？」

「か、か……かおるさっ」

瞳に涙をいっばいためて泣くのを我慢するのとか、もうとてつもなくうふふな光景らしく、柚子さんがくすくす笑いながら撮影会開始

いや、ね。らしくとか嘘ですごめんなさい。

オレも素敵だと思ってましたてゆーか思ってる！！

本来は止めないといけないのだろうが、今のオレには無理。

だって、だってさ！！

オレ、変態だよ、凄く。

自覚はしてるんだって。

そんな訳で。

止めません。

「ごめつなさい……許し」駄目だ。ろくに自分の言いたい事も言えない子には制裁が必要だよな？」

今夜はうちに来い。

“オレの気が済むまで”痛くしてやる。

耳元で囁く様に、誘惑する様に、薫さんは意地悪に言う。

ええええ、待って、その痛みに限界はあるの、無さそうな気がする
のはオレだけっつ？！

「はい……。分かりました」

「よし」

いやいやいやいやいや！！！！

オレが口出し出来る事じゃ無いけどさあ、瑞穂さん早まんない方が
良いって絶対に。

「薫さん……キスが欲しい」

「お前はどんだけ欲求不満なんだ。夜嫌だからやめてって言っても
やめない位の事はいくらでもしてやるから、我慢しろ」

「無理です。……あなたのっ、せいで」

「我慢出来ないならどこをどうして欲しいのか、具体的に言わない
と分からないぞ？」

うわああ……意地悪だ。

先代生徒会長ってとんでもないドSって聞いた事あるけどさ、これは……。

たまらない!!

でも。

何でそんなに瑞穂さんは嬉しそうなの？
Mなの？！

「うふふ、そう。Mなのよ、瑞穂は。……はあ、素敵ね、素敵よ。
このテンションでいけば世界一怖いバンジージャンプも笑って飛べるわ!!」

やる!!
彼女なら笑って飛ぶ!!
何か確信しちゃう。

でもオレだってこのテンションでいけば世界一怖いジェットコースターだって乗れちゃうよ!!

あ。

……………笑っては無理かも。
だってオレ高所恐怖症だもん

くだらない事をつらつらと考えていたその時。

「尚輝っ、いるかぁ？」

え？

「羽恋」

何でここに？

「尚輝が柚子さんと生徒会室に行ったって、聞いたから……。まだいるなら、一緒に帰ろうと思って……」

羽恋っ……

「そうだね。そろそろ帰ろうか。あ、シャープペンありがとう」

刺激的な場面をガン見た後だから、何か和むなあ……。
周り変態ばっかだし。
オレもだけど。

ふわふわの明るい茶髪をくしゃりと撫でると、嬉しそうに目を細める。

「んむ。帰る」

「それでは。柚子さん、紅茶ありがとうございます。薫さんも瑞穂さんも、お幸せに?では」

デジカメとドSとドM（後書き）

デジカメ少女は腐女子でした。

今更（笑）

それぞれの夜（前書き）

健気な羽恋と鈍感で変態な尚輝のすれ違い？の話し。

それぞれの夜

羽恋 side

『あははっ、羽恋って寂しがりなの?』

「んっ……最近、尚輝とよく話すし、一緒にいるからな……夜、無性に寂しくなったりは……する」

『ふふ……羽恋は可愛いね』

電話先のその声にどきり、と心臓が鳴る。

尚輝にそう言われると、オレはいつもおかしくなる。

いつからかは……分からない。

分かっても意味無いしな。

それにな。尚輝に“恋愛感情”で好きだなんて言っても困らせるだけだろ?

だから、フタをする。

オレの訳分らない感情に。

「……尚輝は」

オレが好き?

そんな事、言える筈が無かった。

そんな事を言えば、尚輝は好きだよと言う。

——友達として。

オレはそんな答え、
求めてない。

だから言わない。

『うん？』

「……お休みなさい」

『お休み、羽恋。——ああ、待つて、まだ切らないで』
「な、何だ？」

好きだつて、言うて欲しい。たとえ、友達つて意味でも、その言葉
が欲しい。

先程とは明らかに矛盾した願い。

訳、分からない。

——ちゅ

『お休みのキス。何だか、今の羽恋おかしかったから。オレの出来るせめてもの慰め、かな』

「……………ありがとう……………」

震える声で必死に言葉を紡いで。

『羽恋……………泣きたくなったら、いつでも電話して。何処にでも行くから、ね』

「ん……………あ、ありが……………」

優しいな、愛しい声はお休み、羽恋。

何度も何度もオレの名前を読んで、慰めて、お休み、と言って。

そして。

『羽恋が大好きだよ』

とろけそうなほどに、甘く甘く囁いて、もう一度キスをくれた。

こんなの、反則だ。

……また、苦しくなっちゃうよ……。

尚輝 side

はあゝ。

ベッドでごろごろしていると、自然とため息が出た。

……羽恋が凄く可愛かった。

本当は、ぎゅーってしてちゅーして辱めてあげたいんだけどね？
会えないし、ちょっとおかしかったし。

んじゃ電話でいちゃいちゃ、ってのも何かあれかなって。

それにしてもさ。

薫さんと瑞穂さん……どうなっちゃったんだろ。

だって、あんな会話しちゃって。

薫さん鬼畜ドSだし、瑞穂さん信じられないドMだし。

いじめられてめちゃくちゃ喜んでたよ、瑞穂さん。

瑞穂さんファンが可哀想というか、どんな反応するのかぜひとも見てみたい！！！！

……きっと、今頃沢山いじめられよろこんでるんだろな。
簡単に想像出来るのがある意味悲しいよね？

「ふぁ……」

参った。

何だか、興奮してきちゃったよ……。

DSとDMの夜（前書き）

ちよいしリアス、

うふふなイベントは起きません（笑）

DSとDMの夜

瑞穂 side

比等学園は比成学園と違って寮生活が出来るようになっていて。
薫と瑞穂は寮生活をしているので、うちに来いとはつまり部屋に
来いという意味。

「お……おじゃまします」

薫さんには、七時きっかりに来いでないと焦らすと言われてしまっ
たので、一秒単位もズレない様に部屋へと入った。

鍵は開けてある

愛想の欠片も無いメールの通り、ドアはあっさりと開いた。
けれど、薫さんの姿は見当たらない。

——じ、焦らしプレイもう始まってたりして？

「始まってねえよ」

薫さんっ、何処にいたんですか!!
振り返り際にそう言おうとして。

「っ……!!」

無理だった。

あまりにも衝撃的な姿に言葉がつまる。

「か、おるさ……ん」

「何安心してんだよ」

薫さんは……

薫さんは……。

バスローブを着ていた。

「何でバスローブなんですか……」

「決まってるだろ、風呂だ風呂」

不意打ちだから、ほら不意打ちだから。
ときめいても、良いんですよね？

首筋を伝う雫。

濡れそぼった髪の毛。

相変わらず冷たい双眸。

がばりと開いた胸元。

余りの色香にくらくらします……。

どさりと本革のソファ―に腰を下ろして、長く綺麗な脚を組む。
肩にかけているタオルでわしわしと深緑の髪を拭いている横に腰を下ろすと、何故か薫さんはとんとん、と指で自分の膝を指した。

「え？」

「座れ」

えっとつまり……

「オレの上に来い」

めめめめっそうも無い！！

「オレが来いつつてんだから素直に聞きあがれ。そんなにオレが嫌いか」

「それは無いです！-」

「知ってるからさっさと来い」

ですよ、知ってますよねー……。

では無く。

「っ……」

そんな事しちゃったら……

オレは確実におかしくなります。薫さんは意地悪な顔してるんだろ
うな。

そう思ったのに。

薫さんは、悲しそうに整った顔を歪めていた。

……忘れてました。

あなたは凄く感情的な方でしたね。

「……何を躊躇してるんだ。オレがお前の気持ちを受け止めないか
らか」

違います。

オレの身勝手です。

それにオレは知ってます。

……あなたは、とても慎重な方だって。

“オレの為に”世間体を気にしている事だって知っています。
オレの気持ちを受け止めてしまったら、何時でも何処でも傷付く事
になってしまふから……わざと、受け止めないんですね。

『瑞穂が大好きだから、オレはあえて受け止めない』

柚子さんにそう言っているあなたは苦しげで、つらそうだった。
同性同士であんな事やこんな事……位なら、セフレだって割り切る
事が出来なくもない。

……かなり無理があるけれど。
でも、オレの恋愛感情を受け止めてしまったら……

同性での恋愛を認めた事になる。隠し通すにしても、さらけ出すに
しても瑞穂がつらくなるからと……そう言っただあなたを見てしまっ
た時。

悲しくてつらくておかしくなったと同時に、あなたの真の優しさに
気付いた。

あなたがわざと意地悪をする事にも気付いた。
そんなあなたは、たまに優しくなりますよね？想いを受け止めない、
罪滅ばしのように。

だから嬉しいけれど、悲しくもあるんです。

「……………って、……………だ……………」

「……………何だ？」

「好きって、言って下さいっ」

口先だけでも良いから。

そしたら……………悲しい気持ちは忘れるから。

せめて、欲しい言葉を下さい。

「……………そしたら、我が儘はもう言いません」

「嫌だ」

「っ、どうして」

「我が儘言わない？ふざけるな。そんな事になったらお前を抱けないだろが」

おっかなすぎる瞳で睨まれる。

「……………やっぱりつらいよな」

かと思いきや、しゅんと沈んでしまう。

「——分かった。オレの気持ちに折り合いを付ける。オレもお前を傷つけるのは不本意だ」

ごめんな。

そして急な謝罪。

余計悲しくなつて、自然と視線が下がる。
唇をぎゅっと噛んで気持ちを紛らわせて――。

「っえ？」

何故か体が傾いて、そして視界いっぱい広がる薫さん。
鼻先をくすぐる控えめな薔薇の香り。

「身勝手って事は分かってる。早めに折り合い付けるから」

オレは、

薫さんに膝枕をされていた。

薫side

本当に身勝手だ。

瑞穂がオレを好きなのは良く知ってる。

……オレも瑞穂が好きだし。

でも。

オレ達には世間体と常識って壁がどーんと立ちはだかってるんだ。そんな事気にするなんて馬鹿ねえと柚子に笑われたが、こればかりはどうにもなんねえ。

「薫さん。あんまり悩まないで下さい。……勝手な事言ってますみませんでした。薫さんが困る事言ってるって、分かってるんです。分かってるんですけど、悩まないで欲しいんですけど、でもオレはあなたが好きで仕方ない「好きだ。……お前が好きだ。だから、待ってくれ」

すげえびっくりしてるし。

まあそうだろうな。

オレがお前に好きって言わない様にしてた事、薄々気づいてたみたいだし。

「……分かりました。それで十分です。我慢、出来ます」

「良い子だな」

本当はつらくて仕方ないんだろ？オレのせいで……ごめんな。
泣きそうなの、必死で我慢してるんだよな。

「悪いのはオレだ。泣け」

何だかんだ言っ、逃げてるのはオレだって事もよく分かってる。

……そうだ。

何とかすれば良いんだ。

せめてこの学園内の常識を覆してしまえば良い。
瑞穂を、オレを変だと言う奴を、何とかすれば良い。

そんでさっさと折り合いを付ける。

「ふえっ……う、く……」

ぼろぼろでっかい雫を流して泣く瑞穂。
本当はこんな姿見たくない。

笑ってる瑞穂を見ていたい。

オレを翻弄させる常識が憎い。
常識を作り出した世の中が憎い。

瑞穂を泣かせるオレが憎い。

だから。

絶対に、革命を起こす。
常識を覆す。

「折り合いを付けたら、抱かせて」

泣きじゃくっている瑞穂はこの言葉が聞こえなかったようだ。
独り言だから良いけど。

「優しく抱くから」

折り合い付けるから。
それまで、オレを好きでいてくれな。

やっぱり羽恋は可愛いよね。

「なおきい……」

教室に入るなり泣き出しそうな羽恋の声がオレを迎えた。
瞳をうるうるさせて眉根を寄せる。

何があつたか分からないけれど、誰かがこんな可愛い羽恋を朝から見せてくれたんならその人に感謝と敬意を示す……じゃなくて、そいつはぎゃふんと言わせないとね？

前の席にすんと腰をおろした羽恋の頭をなでなで。

「んー……」

「羽恋、どうしたの？ 言える事なら言つてね」

「ん……む。あ、あのな。えと、えつと……引くなよ？」

「引かないよ、大丈夫。言つてごらん」

言つてごらん。場合によってはハグしてこよ……蹴っ飛ばして来よう。

「実は……へ、変な夢見たんだ」

「夢？」

尚輝に嫌いつて……言われる夢。

羽恋がそう呟いた瞬間……。

「へあつ?!」

ぎゅうぎゅうと抱きしめずにはいられなかった。

「羽恋……オレが好き？」

「ななななんだよつ……あひつ、くしゅぐつたあ……うう、好きだぞ。好きだから、悲しかったんだ」

羽恋可愛い可愛い!!

夢？ 羽恋の夢にオレが出たの？ それだけでも良いのにオレに嫌いつて言われて悲しかった？

「ありがとう嬉しいよ。お礼に何かお願い聞いてあげる」

「お願い？ 何でもか？」

「うん」

あああ……あんまり見つめないで。心臓痛い。

「ん……と。ちゅうして。口にじゃないと駄目だ。……出来れば、いっぱいが良い」

ぶっ！！

羽恋ちゃん羽恋ちゃん。

そんな事言ったらお持ち帰りしちゃうよ。しかもちゅうだけじゃ終わらないよ？

ねえ良いの？！

良いんだねやったあ！！

「あつ……駄目か？……だよ、な。無理言つてごめん」

はいもういいです。オレ決めた。変態つてばれても良いや。

「誰が駄目なんて言っただのかな？羽恋が望む事ならなんだってしてあげる」

そしてこそりと耳元で。

「キスだってそれ以上の事だってね」

「ふあうっ……」

「キスは唇だけで良いの？体にはして欲しくない？ここは？」

「んっ……！！」

「感じちゃうんだね」

薄いシャツの上から胸の突起を軽くつまむとあからさまにびくりと肩が跳ねる。

「それじゃあここは欲しくない？」

「ひあん」

「やっぱり感じちゃうんだね。可愛い体……。あんまり反応するとオレまで感じちゃうから勘弁して」

下半身の膨らみをするりと撫でて羽恋の興奮を限界まで煽る。

「ほしい……なおきが欲しいっ……羽恋、なおきといっぱいぐちゃぐちゃになりたい」

「良くできました」

「ふぁ？えへへっ」

ぴろり〜ん

「ななななんだよ今の」

「羽恋があまりにも可愛いからつい。えっちな事言う羽恋も可愛いかったから……。もう一回言って」

「嫌だ！！」

「ねえお願い。いっぱいぐちゃぐちゃにしてあげるから」

「……どれ位？」

「いっぱいはいっぱいだよ。羽恋に沢山あん言わせてあげる。体力が続く限りずーっと一緒にぐちゃぐちゃ」

「あうう……そんな事したら死んじやいそうだな」

何を想像したのかさらに赤面。

すかさずぴろり〜ん。

それにふくれた様子をさらにぴろりろり〜ん。

「尚輝っ、怒っちゃうぞ」

「羽恋が怒っても可愛いだけだもーん」

ああ楽しい。羽恋ファンの視線も廊下の視線も痛いけど、楽しいものは楽しいんだよねえ。

「ふーんだっ」

「ふふっ。——ねえ羽恋？」

「何だ？」

「土曜日、遊ぼっか」

「ん……んむ、分かった」

教室と廊下の騒がしさはこの際無視無視。

今オレが考えられるのは、羽恋の事だけだもーん、なんてね。

最近みんな熱出すなあ。(前書き)

ネタが無い訳じゃ無いんです、ええ。あるはあるんです、過激ですが(笑)

最近みんな熱出すなあ。

午後はひたすらあらゆる教科のプリントをやらされた。

最近女子生徒が痴漢の被害に合う事が増えているらしく、先生達は緊急職員会議中である。もちろん監督の先生なんて誰一人としていない。それでも真剣にプリントに向かうのは、流石県下トップの進学校と言える。

比等と比成の違いは寮が有るか無いかだけでは無い。

進学校か進学校で無いにもある。

教室に響くのは時計の針の音とシャープペンシルをカリカリやる音のみ。

疲れたな……。

そんな中、呑気にあくびなんかをしているのは尚輝である。

束で出されたプリントをとくに終わらせて、やること無いなあどうしよう、問題が解けなくて焦っている人が知ったら睨まれそんなことをぐうたら考えていた。

銀縁の眼鏡をかちやりと押し上げてペン回しをし始める。

土曜日、楽しみだな。

羽恋とは最近よく遊ぶけど、キスの約束は初めてだし。いや、当たり前なんだけどね？

どんな反応するか？

可愛く喘いでくれたら嬉しいけど本人には言えないし。成り行きに任せるしか無い。

とりあえずさっきの反応で感度が良いのはよく分かった。
まあ行ける所までは行かせてもらっけどね。

「すーすー……」

そんなこんな考えていると羽恋が小さな息使いが聞こえる。
どうやら完全におねむの世界に行ってしまったらしい。

「んむむ……」

どうしよう。

寝顔見たいかも……。

思わず舌なめずりをしてしまう。

よっし、我慢はやーめよ。

という事で、少しだけ身をのりだして覗き込む。

どんなかなあ、きつと可愛いよなあ……。

え……………？

羽恋？

何故かそこには、真っ赤になって泣き出しそうな羽恋。

嫌な予感がする。

不安にかられてがたんと席を立ちおでこに触れる。

「熱い……」

おでこも、手も脚も熱い。
全部全部熱い。

羽恋は凄い熱だった。

「保健室行こう」

「でも……」

「でもじゃ無いよ」

「……でもプリントが」

「羽恋、殆ど終わってる」

「違う。尚輝が……」

尚輝が、先生に怒られちゃったら……。

参ったな、こんな時まで人の心配？

んー…… 本当はこんなえらっそうな事言いたくないけど。
納得させるためなら。

「羽恋、オレを誰だと思ってるの」

「ふあっ…… 無駄な心配でした」

「うんうん。だから保健室行こうね。だっこしてあげるから。……

土曜日遊ぶんでしょ？体調崩したままなら、無理だよね」

「ん…… あい」

羽恋がこくりと頷いたのを見て、膝の下に腕を差し入れる。

「っ、おんぶじゃないのか」

「うん。ほら、腕を首に回して。行くよ」

よいしょと。

羽恋が腕を回したのを確認してからゆっくりと立ち上がる。

茶髪の癖っ毛が首をくすぐる。体はやっぱり凄く熱くて。

本当につらいのだろう。首をだらりとさせて、涙をぼろぼろ流している。

「っ……、熱い……あついよ……」

今朝は大丈夫そうだったのに……何で。

「つらいね。……熱いね。でも大丈夫。楽になるまでオレがずっとついてあげる。楽になったら沢山キスしようね」
「んっ、する。いっぱい……」

そして唐突に。

尚輝が好き、大好きだ……ずっと、オレといて……オレとして……。

多分無意識にそう呟いていたが、その言葉は尚輝に届かないままは
かなく消えた。

羽恋の切実な想いは届かないまま……。

アフターイベントは保健室（前書き）

少しぶりです。先生の初絡みは保健室の先生になりました。
個人的に結構好き（＾w＾）
残念なイケメンは好物です。

アフターイベントは保健室

「真田、と……舞亜か。どうした」

「羽恋が凄い熱出したから連れてきたんです」

「ほお……そうか」

保健室の志摩先生はベッドをぼんぽんとやって座れよとすすめる。すすめられるがままに羽恋を姫抱きしたまま腰をおろすと、体温計をぶん投げてきた。

「志摩先生、危ないです」

「体温計ってやれ」

無視かいな。

まあこういう人だよな。

志摩先生はセミロングのくせつ毛栗毛をポニーテールにまとめて体調確認の用紙を出した。

しなやかな指も動作も素敵な美人先生。結構ツボだったりする。

「なあ真田」

「何ですか」

「舞亜とそういう関係なのか」

「ぶはっ?!」

何を言い出すかと思ったらこの人は。

「あっはんは済ませたの?」

「いやいやいや何でそうなるんですか」

「だってお前手早そうなんだもん」

大当たりです。

流石スペシャリスト。

……じゃなくて。

「そんな関係じゃありませんよ。何でそうなるんですか。……羽恋、熱計るね」

「……ん、ありがと……」

ワイシャツのボタンを上から三つ解放して体温計のスイッチオン。
脇の下にするりと滑り込ませて腕をおさえる。

羽恋の小さなごめんなさいの声に笑顔と頭を撫でる事で応えて、志摩先生の言葉を待つ。

羽恋の少し白めで柔らかな肌が物凄くいろんな意味で目の毒だけど我慢する。触りたいけど我慢する。すつごく我慢する。

「だって校内で有名じゃねえかよ。真田と舞亜が最近凄く仲良いで。そういうのが好きなタイプの女子がかなり騒いでっぞ」

……知らなかった。

「でも仲良いつて言えば先代生徒会長と現代生徒会長もじゃないですか」

「まあな。でもあいつらいちゃつかねえもん」
確かにそうかも。

「つまんねえ」

「生徒を不純な目で見ないで下さい」

ふと体温計を見ると、数字がぐんぐん上昇していく。

37.5 37.8 38.1 38.3.....

「気にしてるのか」

「何をですか」

「性別を」

「.....」

つくづく分からない人だなあ。

「好きになつた相手が同性だから気にしてるのか」

「.....はい？」

「そうかそんなに気にしてるんだな」

だから何でこの方は人の話し聞かないかな。

「好きなら性別の壁なんてたいしたこと無いだろうがよ」

「いえ大分たいしたことですよ」

だからオレは悩んでるんだし。好きになるのが必ず男だから。

そう思うけれど志摩先生に言われると何だかたいしたことじゃ無い

ような気がしてくるから不思議だ。けど言葉では認めないよ。じゃないとこの人は確実に調子に乗る！！！！

「そんな事無いぞ」

「有りますよ」

「無い無い」

「有りま」

ピピピピッ

ある意味ジャストタイミングで体温計が鳴る。志摩先生の相手に若干疲れを感じてたからほっとする。

そこに表示された数字は。

「39.5……」

「早退だな」

そっか……早退か。

羽恋がいない学校なんてつまらない。やだなあ……オレも帰っちゃおうかな。

「それはダメだぞ」

「何で考えてる事分かったかはあえて突っ込みません。でも語尾の星マークは今すぐ撤回して下さい」

「えー」

「いい大人がえーとか言わないで下さい」

何でこんなに残念なの、何でこんなに残念なイケメンなのあなたはほら羽恋がじつとりした目してるよ、気づいて！？

「まあとにかく舞亜は早退。家に誰か居るか？」

瞳をうるうるさせて首を横にぶんぶん。

「誰も居ないのか……仕事？」

「は、い……ふたり、とも……し……ごと」

なら仕方ないな。ここに居る。

オレの膝に跨っている羽恋の頭をわっしやわっしやしてにこりと笑う。

ほんと、こういう表情は様になるのに。

「真田は……プリント終わってるよな」

「はい」

「ならここに居れば良い」

「え？」

「だって舞亜が悲しそうな目してんだもん。可哀想だろ、お前が帰っちゃ。……なあ舞亜？真田居た方が安心するだろ。居てっってお願ひしてみたら？」

志摩先生の言葉に火照った頬をさらに火照らせて。

「なおきい……」

「うん？」

瞳に涙まで浮かべて。

「帰っちゃ、や……」

オレのシャツをギュッと握りしめて、お願いと呟く。

うん？オレ？

悩殺されました。

アフターイベントは保健室（後書き）

志摩先生、今後もちょうくちよく出してハーレムに引き込もうと思います、はい。

その頃のクラス

その頃教室は。

カリカリカリカリカリ、
カリカリカリカリカリ。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ。
ひたすら書く音書く音。

最初はそれだけだったのだが。

「舞亜と真田って似合うな……」

誰かがぼつりと独り言を漏らした後からはもう、カリカリカリカリ
カリでは無く、

ざわざわざわ……という状態だった。

「舞亜様可愛いしなあ」

「真田綺麗だもんな……」

「呼び捨てるな、様付けろ様を」

本人達の居ない場では、崇められちゃってたりする。

ちっちゃくて、少し勉強が苦手でスポーツ万能で可愛い羽恋。少し
とは言っても、全国トップクラスの学校。一般常識で測ろうものな
らば、その頭脳はずば抜けている。

背は高めで成績超優秀でスポーツ万能で容姿端麗な尚輝。

男女共々好かれていて、本人はその事を全く気づいていない。どう
やらそれもツボらしい。

「……オレさっきの写メったぞ」

「くれ!!」

「いやオレだけに」

「駄目だオレが」

「やらん駄目だ」

らしく無くぎゃんぎゃんと騒がしい教室。注意された事は言わずと
も分かるだろう。

「みんな静かにね？」

しかもそこに現れたのが学園のアイドル的存在の理事長、比等とあれば。

「理事長っ……！」

理事長親衛隊が存在して、学園の生徒の八割は加入している。このクラスの生徒も当然。

「奥さんいないんですか」

「好きな人はっ」

「同居とかは？！」

「いません、してません。みんなプリントは終わったの？」

「「終わりましたー」」

「そう。さすが」

理事長の笑顔に悩殺される生徒が続出した頃、授業終了のチャイムが鳴った。

そこから少し時間を遡った保健室は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2781v/>

とある隠れ変態の物語

2011年10月9日18時27分発行